



Data

監督・脚本・VFX：山崎貴
原作：百田尚樹『海賊とよばれた男
（上下）』（講談社文庫刊）
出演：岡田准一／小林薫／吉岡秀隆
／染谷将太／野間口徹／鈴木
亮平／ピエール瀧／綾瀬
はるか／堤真一／近藤正臣
／國村隼／光石研／黒木華

👁️👁️ みどころ

出光興産は「民族系」石油元売り会社のトップだが、本作のモデルとなったその創業者・出光佐三はなぜ海賊とよばれたの？彼こそ北九州の門司から満州、南方へと風雲児のように石油販売を拡大した本作の鐵造だが、敗戦を迎え、国策会社・石統（石油配給統制会社）からパージされてしまうと・・・。

「一人もクビにしない。社員は家族。」そんな「大家族主義」の社是が、苦境になればなるほど発揮されていくストーリー展開は面白い。そして、英国海軍による拿捕も恐れず、1953年の日承丸事件によって、イランから石油を運ぶという「奇手」を成功させた感動のクライマックスに注目！

混迷を極める今こそ、こんな日本人がいたことをしっかり思い起こすことが大切だ。



■□■あっちはホントの海賊！対してこっちは？■□■

戦国時代に瀬戸内海を席卷した「海賊王」村上武吉の娘・景（きょう）が、信長に追い詰められ窮地に陥った本願寺を救うため戦いに身を投じていく姿を描いた、和田竜の『村上海賊の娘』（13年）が大ヒット。それに対して『海賊とよばれた男』と題された本作は一体何？『村上海賊の娘』は真正正銘の海賊の娘が主人公だが、『海賊とよばれた男』は主人公が「海賊とよばれた」だけで、その実態は私たち団塊世代が大学生だった頃、就職先の1つとして考えた大企業の1つである出光興産の創業者・出光佐三だ（現に、私のいとこの1人も、技術系で1971年同社に就職し定年まで全うした）。

彼の著書は私も大学入学直後に読んだ『マルクスが日本に生まれていたら』（66年）が

有名だし、出光興産という会社は何といっても同社のキャッチフレーズである「社員は家族。社員の首は決して切らない」という「大家族主義」が有名だった。私たちの世代が4回生で大学を卒業して就職を目指した1971年当時は高度経済成長がずっと続いていたから、国立1期の大学を卒業していれば概ねどんな上場企業へも就職可能だったが、その当時からファミリー主義、民族系石油会社として独自の道を歩む出光興産は特別ユニークな企業だった。もっとも、その当時はその創業者出光佐三が「海賊とよばれた男」だったとは知る由もなかったが・・・。

しかして、なぜ彼は「海賊とよばれた男」なの？それはデビュー作である『永遠の0』で大ヒットを飛ばした百田尚樹氏が第10回本屋大賞を受賞した『海賊とよばれた男(上下)』(12年)によって明らかにされることに・・・。

■舞台は同じ！石炭は玉井金五郎、石油は出光佐三！■

私は中学時代に火野葦平の『花と竜』(52～53年)を読んで夢中になった。そのため、石原裕次郎が主演し浅丘ルリ子が共演した映画『花と竜』(62年)を観たかったが、中学生という身分の問題とお金の問題のため当時は封切館で観ることはできず、大人になってから何度もテレビの放映で観ることになった。そんなこともあってその直後に高橋英樹が和泉雅子と共演した『男の紋章』(63年)、『続男の紋章』(63年)とそれに続く『男の紋章』シリーズにも夢中になったが、やっぱり『花と竜』の小説はメチャ面白かった。その映画を観たかったのはきっと、文字の世界から映像の世界をいっぱい想像していたためだ。『花と竜』の舞台は北九州・門司。テーマは石炭。そして主人公の玉井金五郎はもともとヤクザではなかったが、玉井組を引き継ぎヤクザの組長になっていった。

本作の評論でなぜこんなことを書いているの？それは『花と竜』のテーマは石炭、本作のテーマは石油という違いこそあれ、それに命をかけた男の生きざまが共通しているためだ。また、舞台が門司市(現・北九州市門司区)で共通しているところも面白い。何よりも興味深いのは出光佐三はずっと「店主」と呼ばれていたが、大企業の社長であり今風に言えばCEO(最高経営責任者)ではあるものの、本作のハイライトとなる日承丸事件で「これまでずっとバクチばかりやってきた」と自分自身を振り返ることからもわかるとおり、その本質はヤクザかもしれない。そう考えると、玉井金五郎と出光佐三は取り扱った商品が石炭と石油という違いこそあれ、共にヤクザという点でその生きざまは共通しているわけだ。もちろん、ここでいうヤクザはいわゆる任侠のことで、シャブや売春で違法な稼ぎをするクズみたいな人種のことを言っているのではない。しかして、出光佐三が生涯、石油をめぐって求め続けた任侠道とは一体何？それをよくよく考えていくと、あの東亞戦争(太平洋戦争)に通じるものがあることがわかるので、より興味深いことになる。

私は『海賊とよばれた男』の小説を今年3月、病院に入院している時に一気に読んだが、そりゃ面白かった。『永遠の0』は映画が先、小説が後だった。それに対して『海賊とよば

れた男』は小説が先、映画が後になったが、さて『永遠の0』に続いて山崎貴が監督・脚本・VF Xをつとめた本作の出来は？

■□■米も大事だが、石油はそれ以上の生命線！■□■

1941年12月8日真珠湾攻撃を仕掛けたことによって日本は米英と戦争状態に入ったが、1931年の満州事変、1937年の日華事変で中国大陸における満州国の経営が大変なのに、日本はなぜ米英にまで戦争を広げたの？そのキーワードはただ1つ、石油（の確保）にある。そのことは本作のプレスシートにある中嶋猪久生（中東経済専門家／石油史研究家）の『『海賊とよばれた男』の時代背景 日本と石油は、どのように関わってきたのか？』にも書かれているが、この解説を読むまでもなくそれは常識だ。

軍艦や飛行機を動員した戦争になるのはある一瞬のタイミングだが、そこに至るまでには長い長い「経済封鎖」とそれをめぐる外交交渉がある。そして、経済封鎖で最も打撃を受ける対象は米ではなく石油なのだ。興味深いのは、その構造が戦後70年を経た今でも全く変わっていないこと。アメリカでシェールガスが供給され始めたことによって近時は中東の石油のウエイトが少し減少したとはいえ、第2次世界大戦終了後も中東諸国では今日まで一貫してどこかで紛争（戦争）が起きているが、その原因はすべて石油。そして、世界の石油を牛耳るのは、もちろんアメリカの石油メジャーだ。

本作は1945年3月の東京大空襲のシーンから始まる。大きくクローズアップされたB-29の腹から吐き出される爆弾は、途中で無数の焼夷弾に分裂して東京のまちへ降り注がれていく。それを迎え撃つのは2機の夜間戦闘機「月光」だが、あえなく撃墜。そんな経緯を経て1945年8月15日に敗戦日を迎えた敗戦国には、国家を再建するに不可欠な石油はあるの？アメリカは戦後の日本に民主主義を持ち込み、脱脂粉乳やチョコレート、キャラメルをふんだんに与えてくれたが、肝心の米は？また、ある意味でそれ以上に重要な生命線たる石油は？

■□■なぜ「民族系」と呼ばれたの？■□■

私は1974年に弁護士登録した直後、3歳年上の若き石油販売会社S社のA社長と知り合った。1979年に坂和章平法律事務所を設立した後、S社は私の2番目の顧問会社となり、A社長とは公私共に親しい関係を構築していった。2015年8月現在、「石油元売り会社」には、昭和シェル石油、コスモ石油という外資系2社とJXエネルギー、出光興産、東燃ゼネラル石油、EMGマーケティング、キグナス石油、太陽石油という6社の民族系元売りがあるが、S社が扱う民族系元売り会社は出光興産だったため、バブル華やかかなり頃はS社のA社長を含むS社の幹部社員や出光興産の幹部社員たちと毎晩のように北新地を飲み歩いていた。A社長も夜遊び、ゴルフはもちろんカラオケ大好き人間だったため、カラオケ合戦では何度も真剣勝負をしたものだ。

それはともかく、当時はガソリンスタンド（GS）を作れば作るだけ売れる石油と軽油の量が増えてS社も儲かっていたため、とにかく販売拡大の一途を目指していた。しかし、GS建設にはさまざまな法規をクリアしなければならないうえ、危険施設だと心配する周辺住民の同意をとりつける必要があったからその建設は大変だった。また、出光興産を含めた元売り各社との石油・軽油の販売供給契約をチェックすることも、顧問弁護士の大切な役割だった。

そんな時代状況の中、出光興産はなぜ「民族系」と呼ばれたの？「民族系」と聞いただけでいかにも「こりゃ右翼？」と誤解されそうだが、それはどこに基準を置くかの問題。当時（今でも）の石油元売り会社は軒並み大手メジャーだったから、「大家族主義」を社是に掲げ、労働組合も持たず、外国資本を一切入れない出光興産だけは純国産企業だったから「民族系」と呼ばれただけだ。昨今その出光興産も、昭和シェル石油との合併問題に揺れている（創業者と現経営陣との対立）が、本作の鑑賞を契機に、今あらためて大手メジャー資本と提携をしない純国産企業としての「民族系」の意味をしっかりと考えたい。

■□■石統とは？構造改革、規制緩和の必要性は昔も今も同じ■□■

國村隼は李相日監督、渡辺謙主演の『許されざる者』（13年）で刀を捨てきれない昔かたぎのサムライを演じて、佐藤浩市演じる明治政府の役人からコテンパンに痛めつけられる役柄を見事に演じていた（『シネマルーム31』88頁参照）。その國村隼が本作では石統（石油配給統制会社）の社長を演じているが、石統とは一体何？

これは敗戦直後つくられた、いわば石油の配給を利害調整するための国策会社だ。戦後の日本は、石油のみならず、お米は農協、政府系金融機関や銀行、保険はいわゆる旧大蔵省指導下の「護送船団方式」によって守られてきたうえ、道路は道路公団、郵貯・郵便は郵政公社等、あらゆる分野で自由競争を阻害する調整組織（談合組織？）が存在してきた。

「和を以て貴しとなす」日本人にはある意味それが向いているのかもしれないが、敗戦後の日本の復興のため、やっとな自由な石油販売業ができると考えた時には既に60歳を超えていた本作の國岡鐵造（岡田准一）にはそれは許せないことだった。とは言っても、GHQの占領下で石統そのものもGHQにペコペコしている時代状況下、國岡商店が石油を供給してもらうためには石統に頭を下げて、「石油を分けて下さい」と頼むしか方法はない。

私は前述した顧問会社のA社長が、飲み屋の席では我儘放題に振る舞っているにもかかわらず、某地でのGS建設については平気で深々と頭を下げている姿を見てビックリしたことがある。A社長と同じように我儘な私にはそれはとてもできないと思い感心してその旨を伝えると、「そりゃ僕の方が先生よりよほど我儘強いもの」と言い返された記憶がある。石統の社長である鳥川卓巳（國村隼）に深々と頭を下げて石油の供給を依頼した鐵造だが、それに対する鳥川の回答は？

■□■なるほど、これだから海賊と呼ばれたのか！■□■

時代は1912年、舞台は北九州・門司。主要燃料が石炭だった当時から石油の将来性を予見していた若き日の鐵造は、國岡商店を興し石炭のまち門司で必死に石油の販売に走り回っていたが、そんな新参者（新規参入者）に取り合う者など誰もいなかった。そんな苦境の中、関門海峡を行き来するポンポン船（焼玉エンジンを用いた小型漁船）からヒントを得た鐵造は、誰もがあっと驚くやり方でこのピンチを打開し、甲賀治作（小林薫）や柏井耕一（野間口徹）ら店員を引き連れ、伝馬船を漕ぎ、次々と海上で油を売りさばっていくことに。

鐵造のそんな強引な販売商法に対して、対岸の下関の石油販売業者は怒り抗議したが、鐵造は「海に下関も門司も関係あるか！」と反論し、新たに入店した東雲忠司（吉岡秀隆）、長谷部喜雄（染谷将太）らも仲間に加えて「國岡商店」の大旗を振り、海上を席卷していった。その姿を見た同業の業者たちは口々に彼らを「こん、海賊どもが！」と呼び、唇を噛んだ。なるほど、これだから鐵造は海賊と呼ばれたのか！

■□■満州での暴れぶりは？■□■

大陸への進出を目指した日本は1932年3月1日に満州国を建設したが、1964（昭和39）年に開通した東海道新幹線と同じように、当時の満州国の大動脈になったのが満鉄（南満州鉄道株式会社）。「あじあ号」をはじめとするその優秀さは特筆ものだったが、あの極寒の地で使われる石油は凍らないの？もしそれが凍ってしまったら、列車はどうなるの？

時代は1917年。舞台は満州。國岡商店の石油事業は軌道に乗り始め、鐵造は妻のユキ（綾瀬はるか）と結婚し、公私ともに順調な生活を送っていた。そして今、鐵造は社員の長谷部と共に極寒の地満州にあったが、その目的は、國岡商店が開発した車軸油を満鉄に売り込むこと。しかし、満鉄はすでに海外の石油メジャーが契約を独占していたから、鐵造の申し出など歯牙にもかけられなかったのは当然だ。しかし石油メジャーの油が寒さに弱く、すぐに凍結してしまうという弱点を発見した鐵造は試行錯誤をくり返し、満州の寒さにも耐えうる新たな車軸油を開発し、新たな売り込み攻勢をかけた。その結果、「失敗すれば満鉄への出入り禁止」という厳しい条件の中で機関車の走行テストが行われることに。そして、石油メジャー各社が居並ぶ中、何と國岡商店の油だけが凍らずに条件をクリアしたから、鐵造は「見てみい！うちの勝ちじゃ！！」と快哉を叫んだが、その瞬間鐵造は世界の石油メジャーを敵に回すことに・・・。

■□■南方にも販路を拡大！しかし、敗戦後は？■□■

太平洋戦争の開始から1年後の1942（昭和17）年、國岡商店の民需用石油の配給

業務は占領地区となった南方の島々にも及んでいた。このように、戦時中も國岡商店の石油販売業は順調に発展していたが、1942年6月のミッドウェー海戦の敗北後、日本は次第に敗色が濃くなることに。

爆撃機に乗って南方の島に戻っていく國岡商店の幹部社員、長谷部が米軍戦闘機に撃墜されるシーンはまるで『聯合艦隊司令長官 山本五十六』（11年）（『シネマルーム28』91頁参照）で見た、山本五十六元帥が襲われるシーンと瓜二つ（?）。これは要するに、この時点で日本の敗戦は既に決まっていたということだ。そして、本作冒頭に観たような東京空襲を経て、焼け野原となった東京で敗戦の日を迎えると・・・。

廢墟と化した銀座の中で奇跡的に焼け残った國岡商店本社ビルに社員を集めた鐵造は、「愚痴をやめよ。日本人がおる限りこの国は必ず再び立ち上がる。下を向いと一暇などない！」と鼓舞激励したが、販売すべき石油が石統を通して一滴も入ってこないことになると、國岡商店は一体どうやって生き延びるの・・・？

■□■仕事は自分で探して見つけるもの！選択の基準は？■□■

①2割司法からの脱却（法曹人口＝弁護士増員）、②裁判員裁判、③法科大学院、を三本柱として始まった司法改革の成否については賛否両論がある。しかし、少なくとも弁護士増員の結果、今や若手弁護士は「喰うのがやっと」という状態になっており、そんな夢のない法曹界に対する志望者は減少し続けている。しかして、今やバッジをつけたばかりの弁護士は就職先探し、仕事探しに懸命だが、敗戦直後、戦地から戻ってくる社員を含めて「社員は一人もクビにせん！」と宣言した國岡商店の鐵造は一体どうやって國岡商店を経営し、社員に給料を払っていくの？そこで始めたのが、新たに迎えた元海軍大佐の藤本壮平（ピエール瀧）のアイデアをそのまま生かした、ラジオの修理事業。これは時代状況を見据えた中でのアイデア勝負で、今でいう総合商社の何でも事業の走りだが、そこに見る鐵造の即断即決ぶりに注目したい。

「仕事探し」のハイライトは、GHQが日本への石油販売を再開するについて突きつけてきた「まず今ある石油の残りをすべて使い切れ。旧海軍の備蓄タンクの底にはまだ石油が残っているじゃないか。それをまずきれいに浚え！」という仕事を國岡商店が引き受け、敢然とそれに挑むシークエンスだ。今ドキの若者は「きつい、汚い、危険」な仕事を「3K」として嫌がるが、旧海軍備蓄タンク底の油を浚う仕事はまさにその典型。そのプロジェクトチームの責任者になったのは東雲だが、人夫が嫌がって逃げてしまった後、彼はいかなる決断を？

石統の鳥川は國岡商店のそんな仕事ぶりを見て「カネのためなら何でもするんですね」と嘲笑したが、油まみれ泥まみれになって働く社員たちを見た鐵造は、上着を脱いで「俺もひと働きさせてくれ！」と作業に参加しようとしたからビックリ。また「店主、服が汚れますから」と抱きしめられるのを避けようとする社員に対して、鐵造は「服は洗えば終

わりだ」と言いながらきつく抱きしめることに。GHQ代表のダニエル・ミラーが國岡商店への石油販売を許可したのは國岡商店の社員と鐵造のそんな仕事ぶりを目撃したためだ。もっともそれは単なる好意からだけではなく、石統と國岡商店を天秤にかけながら國岡商店をうまく利用しようという、したたかな計算だった。映画では、その後そんなストーリーがスリリングに描かれていくのでそれに注目！

鐵造や國岡商店の社員たちのそんな姿を見れば、仕事は自分で探して見つけるものというシンプルな真理がよくわかるはずだから、登録したばかりの若手弁護士はそれを肝に銘じるべきだ。

■□■日章丸事件とは？その意義は？問題の広がりとは？■□■

本作で「日承丸」と命名された2万トン級の巨大タンカー「日章丸」を出光興産が完成させたのは1951年。サンフランシスコ講和条約を調印し、日本が独立を回復した年だ。イラクのフセイン大統領に対してアメリカのブッシュ大統領を中心とした有志連合が攻撃を仕掛けた「イラク戦争」は2003年3月20日に始まり、5月には「大規模戦闘終結宣言」が出されてあつという間にカタがついたが、それまでイランとイラクの間で何度も戦争をくり返していたのは一体なぜ？また、近年イスラム過激派（IS）が台頭し、各地で過激なテロや戦闘行為を展開しているのは一体なぜ？それらの根源は、すべて石油をめぐる争い。そう言っても過言ではない。そんな理解の下で、1953年に現実起きた「日章丸事件」の意義と問題の広がりをしっかり考えたい。

本作で「日承丸」の船長となる盛田辰郎（堤真一）は、鐵造から「イランのアバダンに行ってくれ」と言われると、「私は店主が行けと言うところに行って、戻ってくるだけ」と淡々と答えたが、英国に長年牛耳られていたイランの石油を輸入することは、すなわち英国を完全に敵に回すことだから、これは命がけの航海になる。出航した時に先行を知っていたのは船長だけというのはある意味無茶苦茶だが、そこは百田尚樹の原作でも本作でも、劇的なクライマックスに仕上がっているのでそれに注目！

日本がやっと独立を回復した直後に、石統からもメジャーからも石油の供給を断たれた國岡商店の店主・鐵造が、ここまで広い視野を持ってそんな決断をしたとは！さらに「日承丸が帰らなければ、俺も生きていない」とまで、その決断に命をかけていたとは！低迷と混迷が続く今の日本では、今こそこんな「海賊」にあらためて注目し、学び直す必要があるのでは・・・。

2016（平成28）年10月31日記